
朝日ヶ丘三丁目

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝日ヶ丘三丁目

【Zコード】

Z6667A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

黒猫のボクを通してみた朝日ヶ丘三丁目の人間模様。新しい「主人様となつた、ちょっと頼りなげな高校一年の翔一家を中心には、今日も様々ならドラマが生まれる……。だいたい一話～二話完結の続きものにする予定です。

初めてまして？

『ボクは野良猫です。一歳ちょっとの黒猫の雄です。名前はクロと呼ばれています』

あ～腹減った……。

ボクは丸一日間、水以外何も口にしていない。……死にそうだ。本当に死ぬかもしれないなあ。まだこの世に産まれて一年ちょっとしか経っていないのに。

ボクはフランフランしながら、土手の上を歩く。自慢の黒い毛並みが泥だらけになつて台無しだ。昨日は一日雨が降つたからね。

三日前まで、ボクがよく行く公園に、顔なじみのおじさんが餌を持つてきてくれていた。でも、そのおじさんが急に来なくなつてしまつたんだ。公園に住み、薄汚れた服を着た小太りのおじさん。彼はきっとホームレスだつたんだと思う。

どこに行つたのかなあ？　あのおじさん。住む家と仕事が見つかつたんだろうか？　それなら良いけどね。そうだね、おじさんにとつては……。

けど、ボクにとつては良くない。子猫の時公園に捨てられて、ずっとあるおじさんに餌をもらつていたから、ボクにとつては親ネコを失つたようなもの……。

ネコ年齢にしたら、そろそろ大人だけど、まだまだ幼氣な黒猫だよ。おじさん、ボクを置いていくなんて、酷いよお。ウウウ……。

人間だったら泣くところだらう。でも、ボクは猫だから泣けないんだよね。や、泣いてる場合ぢゃない。何とか食べ物を見つけなくちゃ。

ボクは今にも倒れそうになりながら、土手を歩いていく。こうなつたら、次のご主人様を探さなければ！　キュルルル……。ボクのお腹が大きく鳴る。

とその時、どこかから何とも言えない美味しそうな匂いが漂つて

きて、ボクの鼻先をくすぐつた。香ばしくて甘みを帯びた匂いは、空きつ腹を大いに刺激する。ボクの口からタラタラとヨダレが滴り落ちそうになる。

お御馳走はどこ？　どこ？　ボクは辺りをキヨロキヨロと見渡す。あつ、あつた！　ボクは匂いの正体を見つけた。土手の草むらの中に、白い紙包みが無造作に置かれている。ボクは最後の力を振り絞り、紙包み目指して突進した。

初めまして？（後書き）

家族を中心としたホームドラマが書きたくなつて、執筆を始めました。連載ですが、一話～三話以内の完結の物語にする予定です。連載の両立は上手く出来るでしょうか？……（＾＾・）こちらのはんびりと更新する予定です。宜しくお願ひします。

初めまして？

カプツ！ ボクは白い紙包みに噛みついた。舌先にじわっと伝わる柔らかな感触…… アチツ！ あまりの熱さに絶えきれず、袋から口を離す。『猫舌』のボクは熱い物が大の苦手。けど、空腹には勝てない。思い切つてもう一度かぶりつき、破けた紙袋の中からお御馳走を引っ張り出した。上手い！ それは揚げたてのコロッケだつた。ボクはムシャムシャと音を立てながら、夢中で食べた。一個目を食べ終え、二個目にかぶりつこうとした時、ふと上方に何かの気配を感じた。さては、他のノラが来たか！ お御馳走は渡さないぞ！ でも、ボクは喧嘩が弱いんだよね。しつかりとコロッケを加え、逃げの体制を整えて、ボクは頭を上げた。

「……？」

野良猫じゃなかつた。人間の少年だ。ボクはコロッケを加えたまま、じつと彼を見つめる。彼もボクを見下ろしている。しばらく見つめ合う彼とボク。

「……それ、やるよ」

間をあいて、彼が口を開いた。

「コロッケ好きの友達にやるうつと思つたんだけじや。お前もお腹空いてそうだし」

制服姿の彼は、そう言つとふわつとした顔で微笑んだ。少したれ氣味の目が、ふんわりとした印象を与えてる。いかにも人が良さそうな人間の少年。人は見かけによらないつて言つけど、猫の感として彼は悪い奴には見えなかつた。現にコロッケを三つもくれたし。紙袋の中には、もう一個のコロッケが残つている。餌をくれる人間に悪い人はいないんだよ。これ、猫世界の教訓。

ボクは安心して、彼の前でコロッケを食べ続けた。時々、チラチラと彼を見上げて様子を観察する。最初、ボクが食べている姿を眺めていた彼は、それに飽きたと土手にゴロゴロと横になつた。どこに

行くでもなく、川から吹いてくる風にあたりながら、気持ちよさでうに寝ころがる。

ボクが三つ田の「ロッケを食べ終えた後も、彼は相変わらず転がっていた。

「ちょっとのんびりし過ぎかなあ？ けど、猫が好きみたいだし、彼の家までついていたら、またお御馳走をもらえるかも？ いつのこと居着いてしまおうか！」

色々なことを頭で考えながら、ボクは寝ている彼のまわりをゆっくりと歩いて一週する。

「よし、決めた！ 彼を新しいご主人様にしよう。ちょっとスローテンポな気もするが、彼は良い奴だ。それに、ボクは人間を見る目があるからね。」

いつまで経つても起きあがらない彼にしびれを切らせたボクは、ミヤーとかわいく鳴いて彼の肩をチヨンチヨンと片手で小突いた。ゆっくりと目を開けると、彼はボクの方に顔を向ける。

「ん？ 何？」

ボクはもう一度鳴いて、出来る限り愛想のいい顔を彼に向ける。人間だつたら微笑むつてことが出来るんだけど、猫にはちょっと難しい。招き猫の置物のように、笑えたらいいのにと思う。ボクはまた彼の腕をつつく。言葉が話せたら、彼に自己紹介するのにね。えー、名前は、一応『クロ』って呼ばれてました。年は一歳ちょっとです、とか。

彼は大きく伸びをすると、体を起こした。

「そろそろ帰ろうかな」

ボクの気持ちを察することもなく彼は起きあがり、制服についていた草を払う。そして、ボクを置いて歩き出した。

あつ、ちょっととちょっと待つて。ボクは慌てて彼の後をつける。しばらく土手に沿つて歩いた所で、彼はようやくボクがついてくるのに気付いた。

「何？ ノラも来るの？」

振り向きたま、彼は聞く。『ノラ』？ それボクのこと？

「ノラも家に来るか？』

いや、『ノラ』って名前じゃないんですけど……。ま、いいか名前なんて。今確か、家に来るか？って聞いてくれたよね！ ボクは小走りに彼の元に走り寄り、体をこすりつける。猫のスキンシップだよ。

「僕は、榎本翔えのもとしょつて言つんだ。高校一年」

ボクを見下ろして彼、翔は、そう言つた。ん？ ボクに自己紹介してくれるの？ よろしくね翔。ボクはそう言つつもりで彼のにこやかな顔を見上げ、嬉しい気持ちを目一杯現して鳴いた。

初めまして　？（後書き）

もう覚えている方は少ないかもしませんが（＾＾；）、翔の友人とは「アイドル」のコロッケ好き香田大輝君です。

翔が住んでいるのも大輝や隆輔が住んでる商店街の近くという設定です。香田さんちや隆輔のコロッケ屋もそのうち出てくると思います。

興味のある方は、共同製作「アイドル」をご覧になつてくださいね。（ただ今執筆休止中）

初めまして ？

『さんふらわあ』

土手を途中で下りて、横道に入つた下町の商店街。その商店街をしばらく歩いて行くと、大きな向日葵のイラストが描かれた看板が見えてきた。向日葵バッ克の看板の中央には、ひらがなで『さんふらわあ』と書かれている。

「ここだよ」

翔は、じつと看板を見上げているボクにそう言つと、自動ドアを踏んで中に入つていく。あ、待つて！ ボクも慌てて翔の後に続く。ボクの体重じや自動ドアは開かないからね。 中に入つた途端、香ばしくて甘い香りが漂つてきた。頭上には棚が並び、色んな種類のパンが置かれていた。さつきロロッケを食べたばかりなのに、ボクのお腹はまた空いてきて、ヨダレがこぼれそうになる。あつ、焼きたてウインナがパンの上に乗つてゐる！ いちじジャムの美味しそうな香りもしてくるなあー。ボクはキヨロキヨロしながら、首を伸ばして上を見上げる。

そうかあ、翔の家はパン屋さんなんだね。

「翔！ お店から入つちゃダメでしょ」

突然、奥の方から女人の声がした。

「あつ！ 猫！ 野良猫が入つてるよー」

エプロンをつけたおばさんが、手を上げて叫びながら駆けてくる。

ウヒヤ、恐い。ボクは身をすくめた。

「母さん、この子拾つてきたんだ。飼つていいでしょ？」

「拾つてきた？……」

翔のお母さんは振り上げていた手を下ろし、ボクの真上に来てジロジロとボクを見下ろす。

「桃子が犬か猫飼いたいって言つてたよね。父さんに言つたら飼つても良いって言つてたし……」

翔は上田遣いにお母さんを見ながら、ポリポリと頭をかいだ。

「ねえ、父さん！ 猫飼つていいでしょ？」

翔はお母さんから視線をずらし、店の奥に向かって声をあげた。

「何？ 猫だつて？」

しばらぐして、白い帽子をかぶつた翔のお父さんが出てきた。翔の田をもつとたれ目にした優しそうなおじさんだった。

「おお、黒猫か。おいで、おいで」

おじさんは、ボクの姿を見つけたとたん満面笑顔になつた。手招きするおじさんの方に、ボクは甘えた声を出して近寄つて行く。のどを「口口」口鳴らして、おじさんの足に体をすりつけた。おじさんは猫好きみたい。思いつきり甘えて愛想よくしつかなかせや！

「あなた！ 觸つちやダメよ！」

横からおばさんの大好きな声がした。おじさんは、慌てて手を引つ込める。おじさんに飛びついたボクは、カクツと前につんのめる。

「素手で猫に触つちやダメでしょ。パン作つてるんだから」

床に倒れたボクに冷たい視線を送りながら、おばさんは言つた。

「ああ…… そつだつたな」

おじさんは少し残念そうだ。翔が、おじさんの代わりにボクを抱き上げてくれた。

「良いでしょ？ 世話は僕と桃子がするよ」

ボクを胸に抱いて翔が言つ。

「良いんじゃないかー？」

おじさんは、おばさんの顔色をうかがいながら言つた。

「…………そつねえ」

おばさんは思案顔でフーと息を吐き、ボクの顔をじつと睨つめる。と、その時、お店の自動ドアがブーンと音を立てて開いた。

「ただいまー！」

それと同時に、賑やかな明るい声がお店に響き、「口口」口と「う」大きな音と人の歩く足音が聞こえてきた。振り返つて見ると、そこ

には赤い縁の眼鏡をかけた白髪のおばあちゃんと髪の長い若い女の
人と、中学生くらいのおさげ髪の女の子が立っていた。

「母さん、お帰り。ヨーロッパ旅行はどうだった？」

翔の父さんは、白髪のおばあちゃんに聞く。彼女は、翔のお祖母
ちゃんのようだ。

「最高に楽しかったよ。近いうちにまた行くつもりだ」
「夏休みに行こうよ！ 桃も行きたいな」

大きなスーツケースを「ゴロゴロ」引いていた女の子が言った。
「私もお供するわ。今年は夏休みとれそ娘娘だし」

茶色い髪の若いお姉さんも言う。

「あ、ノラ、僕の家族が揃つたから自己紹介するね」

急に人間が増えたキヨトンとしていた僕に、突然翔が言った。

「え？」と、じつちが僕のお祖母ちゃん、京子ばあちゃん。それから、
お父さんの豊にお母さんの久美子。お姉ちゃんの茉莉子に妹の桃子。
茉莉子姉ちゃんは〇〇一年田で、妹の桃子は中学一年」

「……ちょっと、翔。猫に自己紹介なんかして、この猫分かつてる
の？」

茉莉子姉ちゃんは、チラッと横目で翔を見る。普通の猫には分か
らなくとも、ボクには分かるんだよね。ま、ちょっと五人の名前を
いつぺんに覚えるのは、自信ないけどね。ボクは茉莉子姉ちゃんに
頷いて見せるけど、彼女は気付かなかつたみたいだ。

「おやおや、かわいい猫ちゃんねえ」

京子お祖母ちゃんは、ボクの方に近寄つて来て、ジーッとボクの
顔を見た。そして、ボクの頭をなでなでする。お祖母ちゃんも猫好
きみたいだ。よしー もつとかわいいとこ見せとかなきや。ボクは
喉を「口」口鳴らし、ニヤーンと飛びきり甘えた声を出した。

京子ばあちゃんのたれ目が、もつと下がつて細くなる。お祖母ち
ゃんも翔と同じくたれ目だ。親子三代たれ目の家系みたい。

「名前は何て言うの？」

「う～ん、一応ノラつて呼んでた」

と翔。

「ノラじやちよつとねえ……」

京子ばあちゃんは、ボクの黒い毛を撫でながら考える。

「品が良くておしゃれな猫じゃないかい」

ボクは何も着ていないんだけど……お洒落なのかな？

「パリの雰囲気がするねえ」

パリ？……。あ、京子ばあちゃん、ヨーロッパ帰りなのか。

「そうだ、パリのギャルソンに素敵な青年がいたんだよ」

京子お祖母ちゃんは、旅を回想するかのように、楽しそうにニコニコと笑う。

「確かフランソワって言つてたつけ……あんたの名前もフランソワにしようかね。うん、決まり、今日からお前はフランソワだよ。」半ば強引に、京子ばあちゃんはボクの名前を決定した。

フランソワ……ボクつてフランス猫？　ま、いいか、名前なんてなんだつて。と言つわけで、ボクの名前は、クロからノラ、そして、フランソワへと変わった！

そして、フランソワという名前がついた瞬間、ボクは榎本家の家族の一員となつた。お母さんの久美子さんは、ちょっと不服そうな顔してたけど……そのうち仲良くなれるかな？

ボクは野良猫やめました。今日からボクは、榎本フランソワです

！　宜しく。

翔の友達 ？

「行つて来ます！」

八時二十分。翔はお店の方に声をかけて、横の勝手口から家を出る。お姉ちゃんの茉莉子さんも妹の桃ちゃんも、もつとつくに出かけていた。

翔はのんびりしてゐるなあ……学校、間に合つんだらうか？

ボク、黒猫のフランソワは、ちょっと心配になる。翔のおばあちゃん、京子さんに名付けて貰つた名前、フランソワ……。このお洒落な名前に、ボクはまだ馴染んでいない。もし、ボクがフランスに住んでいるのなら、ピッタリくると思つんだ。パリのセーヌ川のほとりをお散歩するような黒猫ならね。でも、ここは日本の東京、人情味溢れる下町の商店街。ちょっと名前が浮いているかも。

ま、そのうち馴染んでくるかな？ そんなことを考えながら、ボクは翔の後について、勝手口を出していく。

「あれ？ お前も学校行くのか？」

朝日ヶ丘商店街の通りを歩きながら、翔はようやくボクの姿に気が付いた。『帰れ』って言われるのかと思つたけど、翔はボクをチラリと見ただけで、そのまま先を歩いていく。じゃ、ついて行つちやうよ。『猫侵入禁止』の学校じゃないなら、大丈夫だよね。

翔が急いでいる風もなく、いつもののんびりペースで歩いていると、後からリンリン！ と大きなベルの音がして、キキキーン！ とタイヤの軋む音が聞こえた。誰？ ボクをひかないでおくれよ。ボクは後を振り向く。

「翔ちゃん！ 乗つてけよ。後五分で学校始まるよ

ボクの頭上から元気な声が響く。そこには、翔と同じ制服を着た少年が、自転車に乗っていた。

「もうそんな時間？」

焦る風でもなく、翔は腕時計に目をやる。

「チャリを飛ばせば三分で行けるけど、歩きなら間に合わないだろうね」

「そうかな?」

「いいから、早く、早く

男の子にせかされて、翔は彼の乗る自転車の後に腰をかけた。それと同時に、少年は勢いよく自転車を漕ぎ出す。

「あつ、待って、フランソワがいた」

「フランソワ!？」

少年は急ブレーキをかけ、前につんのめりそうになる。

「誰だ、それ?」

彼は、キヨロキヨロと辺りを見回す。ボクです! 榎本フランソワです。ボクはミャーミャー鳴きながら、少年に呼びかける。翔が、ボクのことを見れないでくれていたことが嬉しい。

「もしかして、この猫のこと?……」

少年はやつとボクに気付き、不思議そうな顔で、じつとボクの顔を見つめる。

「そうだよ。僕んちの猫になつたんだ」

「へえ……フランソワねえ」

ボクは勢いをつけ、自転車の前籠に飛び乗った。

「わつ、何? この猫も学校連れて行くのか?」

「うん、なんか行きたそうだったから」

「はあ……」

翔ののんびりペースに引き込まれそうになつた少年は、我に返つて腕時計を見る。

「やっぱ! 後一分しかないや! 超特急で行くからな、落ちないよう気を付けて」

そう言つたが早いが、少年は猛スピードで自転車を漕ぎ出した。ビュンビュンと風を切つて自転車を走らせる。ボクは必死で籠に爪を立てしがみついた。何か恐いけど、スリルがあつて気持ちいいね!

キーインゴーインカーン、自転車置き場に到着すると同時に、始業のベルが聞こえてきた。少年のお陰でギリギリセーフってどこかな？彼は素早く自転車を飛び降りて、自転車を立てかける。ボクも籠からジャンプして、地面に着地した。

「あ、紹介するの忘れてた」

少年が急いで教室に走つて行こうとした時、ふと翔が言つ。彼は立ち止まって振り返る。

「何？」

翔は少年じゃなくて、ボクの方を見下ろしていた。

「フランソワ、彼は僕の幼なじみで同級生の香田大輝君だよ」

「……」

猫のボクに話し掛けてる翔を見て、大輝は目を丸くする。

「翔ちゃん、その猫、言葉通じるの？……」

「さあ、人間の言葉は話せないけどね。言つてる事は分かるような気がする」

「へえ……つて、今はそれどこじゃないよ……」

「またもや翔のペースにはまりそうになつた大輝は、慌ててダッシュする。

「あ、大ちゃん、慌てなくて大丈夫だよ。一時間目生物だから、大河原先生、いつも教室に来るの遅いし」

「えつ？ 生物？ そうだつたつけ？」

翔の言葉に、大輝はピタッと立ち止まつた。なんだ、翔も何も考えてないようで考へてるんだ。……でも、遅刻は遅刻だよね。急いで方が良いんじゃないかい？ とボクは心配する。

「なら、いいか、ゆつくりで」

少し疑問を抱きながらも、大輝は翔の言つことに納得したみたい。

「香田大輝です。宜しく！」

大輝は、人間の言葉が分かる猫だつていう翔の言葉を信じ、ボクの方にかがんで元気に挨拶した。それは、当たつてるよ。大輝君、なかなか言い奴だね。翔とはタイプが違うようで、似ているのかも？

ボクは出来るだけ笑顔になるよう努力しながら、『宜しく』とい
う代わりにミヤーと愛想良く鳴いた。

翔の友達 ？（後書き）

久しぶりに香田大輝君に会えて、なんだか嬉しかったです。（^_^）
ただ今執筆休止中ですが、楓 詩絵莉の「アイドル」に大輝は
登場しています。次回、隆輔も登場予定です。

自転車置き場から歩いていく翔と大輝。ボクは一人の後をついていく。もうとつぐに始業のベルは鳴り終わっているから、他に生徒達の姿はなかつた。

いいのかなあ？ こんなにのんびりと……。ゆっくり歩いていく二人の姿を見ながら、ボクは少しだけ心配する。

「あつ、隆輔先輩！」

正面玄関から入ろうとした時、大輝が立ち止まつた。大輝の視線の先に、一人の男子生徒の姿があつた。ひょろりと背の高いその生徒は、チラリとこちらに目を向けると、悠々と歩いてくる。

「おはようございます！ 先輩、もう授業始まつてますよ。いいんすか？」

大輝は、自分たちのことは棚に上げて、彼に言ひつ。

「ばつか、俺はモデルだぜ。芸能人。俺の遅刻は先生公認の遅刻さ」
隆輔という少年は、翔と大輝を馬鹿にしたような顔で見ながら、顔に垂れた長い前髪を片手でかき上げる。モデルつて芸能人なの？
「特別に俺だけ『茶髪』を認めてくれりやいいんだけどな。毎朝、スプレーで黒く染めるの時間かかんだよ」

「はあ、隆先輩もなかなか大変だね。そう言えば、この前の『朝日ヶ丘商店街の広告』にパジャマ着て載つてたよね。あの『写真は髪が薄茶色だつたな』

翔は隆輔の真つ黒な髪を見ながら言つた。

「あの写真は気に入らねえ。なんで俺がスーパーで売つてるような安物のパジャマなんか着なきやいけねえんだ」

「でも、よく似合つてたよ」

翔は屈託のない笑顔を隆輔に向ける。大輝の先輩つてことは、翔にとつても先輩のはずだけど、翔は彼にタメ口だ。

「翔ちゃん、フランソワに隆輔先輩を紹介しなくていいの？」

足元で隆輔を見上げていたボクを見て、大輝が尋ねた。

「フランソワ？ なんだそれ？」

「翔ちゃんの猫ですよ。ほら、先輩の足元にいる」

「は？……」

視線を落とした隆輔の足を、ボクは挨拶代わりに片手でチヨンチヨンと叩く。

「ゲッ、黒猫……」

招き猫みたいに片手あげて、瞳をうるつるさせて隆輔を見上げたんだけど、彼はもろに嫌な顔をした。隆輔は猫嫌い？ ボクのブリっ子が通用しなかった。

「フランソワ、彼は一年先輩の海棠隆輔君だよ。僕や大ちゃんと同じく朝日ヶ丘商店街に住んでいるんだ。僕ら三人、幼稚園時代からの幼なじみってわけ。家はコロッケ屋さんやってて、隆輔先輩は朝日ヶ丘商店街にある芸能事務所でモデルのバイトやってるんだ」

「なんで猫に自己紹介なんか……」

隆輔は、軽く足を振つてボクの手を払い、怪訝な顔で翔を見る。

「なんでも、人間の言葉が分かる猫らしいですよ」

大輝が真顔で答えた。

「馬鹿みてえ……」

いや、隆輔君。それが本当に分かっちゃうんだよね。ボクはもう一度隆輔の前に走り寄る。

「わっ！ 黒猫が横切つた！ 朝から黒猫が横切るなんて縁起わりい」

そう言つと、隆輔はボクを避けるようにしながら、足早に玄関に歩いて行く。

「隆輔先輩つて案外恐がりなんだな。迷信を信じるなんて」

学校に入つて行く隆輔の後ろ姿を見ながら、翔は笑つた。

「おつと……翔ちゃん、僕らもソロソロ教室に入つた方が良いよ。さすがの大河原先生も来る頃だ」

腕時計に目をやり、大輝が言った。

「そうだね」

翔は大きく伸びをする。

「朝から生物なんて嫌だな」

二人がようやく教室に向かおうと歩き出した時、体操服を着た男子生徒達が、校庭の方へ駆け出してきた。生徒達の後からピッパーと笛を吹きながら先生が駆けてくる。

体育の授業のようだね。

「あれ？ 松平先生だ。あれって僕らのクラスじゃ……」

何気なく校庭に目を向けた大輝は、立ち止まって彼らを凝視する。

「本當だ……」

翔も体操着姿の生徒達を見つめる。

「あ、生物つて一時間目だつたよ。一時間目は体育だつた……」

「え？……」

と、目を丸くして顔を見合せる一人の姿に、体育の先生が気付いたみたい。

「香田！ 榎本！」

先生の大声がグラウンドから響く。

「やばつ、よりによつて担任の授業に遅刻なんて！」

大輝の顔は蒼白になる。二人は大慌てで教室に向かつてダッシュする。ボクも一緒に学校の中に入つて走つて行つた。

「後で校庭十周して來い！」

学校の廊下を走るボク達の後から、松平先生の良く通る声が追いかけてくる。

「松平先生冗談きつい……」

いや、冗談じゃなくて真剣に怒つてたよ。翔は廊下を全力で走るだけで息が上がつてゐる。

時間割の確認はちゃんとしなくちゃね。少しだけ一人の事を気の毒に思いつつ、自業自得かもね、と思うボクだった。

翔が授業を受けている間、ボクは学校探索に出かけていた。学校つて面白い！ こんなに楽しい所なら、毎日通つても良いと思う。授業中の静かな教室にこっそり入ると、流石に先生に怒られて追い出されるけど、休み時間になると、生徒達は興味津々でボクに近寄つて来る。女子生徒達は、『かわいい！』つて、ボクの頭を撫で撫でしてくれるんだ。ボクつてモテるよねえ。ボクは、ちょっとだけいい気になつて、喉を「ゴロゴロ」させ、女子生徒にすり寄つて甘えた。

昼休みのお弁当の時間には、みんなからおすそ分けして貰つて、ボクのお腹はすぐについぱになつた。女子生徒に撫で撫でされる時より、幸せ気分！ 満腹になつた後は、眠くなつて校庭の木陰でお昼寝タイム。そよそよ吹く風が気持ちよくて、ボクはしばらくぐっすり眠つていたよ。

気持ち良かつた。猫に生まれて、ほんと良かつたなあ。

夕方、翔が校舎から出でてくるまで、ボクは校庭をのんびりと散歩していた。

帰りも、翔は大輝と一緒にいた。大輝は自転車を押しながら、翔と並んで歩いて行く。ボクは一人の方へ駆けて行くと、勢いよくジヤンプして自転車の前籠に飛び乗つた。

「わっ、フランソワだ。今までどこ行つてたの？」

のんびりと学校見物にね。ボクはそう言つつもりで、大輝に向かつてミヤーと鳴いた。

「いいなあ、フランソワは自由で。僕も猫になりたいや」

猫はいいよ、気まで。校庭十周が堪えたみたいで、翔はどことなく疲れていた。

「なんだその猫、ずっと学校にいたのか？」

ボク達が歩いていると、後から隆輔の声がした。

「先輩、今日はよく会いますね」

「これから『香田芸能』に行かなきゃなんないからな。今日は学校から直行さ」

『香田芸能』？ 隆輔がモデルのバイトして芸能事務所かな？
「僕も直行です。先輩も自転車に乗って行きますか？」

「は？ やだよ。モデルの俺が自転車通勤なんか出来るか」

「でも、電車で行く方が遠回りになっちゃいますよ」

「いいんだよ。俺はいつも電車通学なんだからな」

隆輔の家も朝日ヶ丘商店街なら、確かに遠回りだね。駅に行く間に、家に着きそうな気もするんだけど……。

「あ、フランスワ、大ちゃんは『香田芸能』で事務のバイトやってるんだ。香田芸能は大ちゃんの伯父さんが経営してるんだ」

翔はボクを見て言つ。

「いちいち猫に説明すんな」

隆輔は白い目で翔を見る。

「や、でも先輩。フランスワは、人間の言葉が解る猫ですから。ちゃんと説明しといた方が良いかもせんよ」

「解る訳ねえだろ！ フランスワって……こいつはフランス人か？」

それを言つなら、フランス猫。でも、ボクは日本猫だけね。

「フランス旅行帰りのおばあちゃんが名付けたんだよ」

翔がボクの代わりに答える。隆輔は軽くため息をつくと、翔と大輝に手を振つた。

「じゃあな」

校門を出たところで、隆輔はボク達と別れ、駅の方へと向かつて行つた。

「絶対、自転車飛ばす方が早いんだけどね」

モデル気取りで颯爽と歩いて行く隆輔の背中を見ながら、大輝は呟いた。

「翔ちゃんも事務所寄つて帰る？」

隆輔が角を曲がって姿を消すと、大輝は翔に聞いた。

「うーん、『香田芸能』や『モダン食堂』や『美容室みるく』もフランソワに紹介したいけど、今日は母さんに店番頼まれてるんだ」そう言つと、翔は籠の中のボクに目をやる。

「フランソワはどうする？ 大ちゃんと一緒に行ってみるか？」
「どうしようかなあ？」『食堂』という響きに魅力を感じるし、『みるく』っていうのも美味しそうだなあ。ボクはしばらく考える。
でも、今日は学校でいっぱい御馳走にありつけたし、まだお腹空いてないんだよね。ボクは自転車の前籠に前足をかけて、どうしうかと迷つた末、ピヨンと弾みをつけて籠から飛び降りた。『香田芸能』はまたの機会に行くとしよう。

「お前も家に帰るのか？」

翔の足元に寄つて行つたボクに、翔が聞いた。そうするよ、という代わりに、ボクはミャーと鳴いて返事する。その様子を大輝はジツと見つめていた。

「やっぱ、スゴイよ翔ちゃん、フランソワは、人間の言葉ちゃんと解つてる」

「フランソワの言葉も解れば便利だよな。オウムみたいに猫も喋らないかなあ？」

「確かに便利かも。でも、ちょっと恐い気もする……」

まあね、猫つて頭良いから、喋る猫が現れたら人間を支配しちゃうかもね。心の中でクククと笑いながら、ボクは大輝を見つめ返した。

「それじゃ

大輝は、少し慌てて自転車のペダルを踏む。ボクの目、ちょっと恐かったかな？ なにしろ、隆輔の怖がる黒猫ですから。先に帰つて行く大輝の後を、ボクと翔もゆっくりと歩いていく。心配しなくても、今のとこボクは、気ままな飼い猫で生きてくつもりだよ。翔の家族や友達も気に入つたし、朝日ヶ丘商店街や学校も楽しそうだ。家までの道のり、翔は商店街のご近所さんについて、丁寧にボク

に説明してくれた。このクリーニング屋さんは とか、ここ魚屋さんは とか。一軒一軒お店の名前と働いてる人の名前まで教えてくれた。もちろんボクは翔の言うこと分かるんだけど、それ違つていく行く人達は、翔のこと変な目で見ていたよ。

翔は全然気にしてないみたいだつたけど、『猫に話し掛ける少年』つて、朝日ヶ丘商店街では、有名になつちゃうかもね。そしたらボクは、人間の言葉が解る猫つて有名になれるね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667a/>

朝日ヶ丘三丁目

2010年10月8日15時28分発行